川島雄三の時代性と特異性

川島雄三は、私にとっては日本映画史の上で、どこかとらえどころのない映画監督です。それは川島雄三が45歳という若さで亡くなったからではないかと思えます。1918年生まれといえば、三つ上に市川崑、二つ上に小林正樹という著名な映画監督がいる訳で、二人とも活動期間が長かったためか、川島雄三とほぼ同世代の人物とは考えにくかったのだとも思えます。外国の著名な映画監督でいえば、イングマール・ベルイマンと同い年ですね。

作家でシナリオライターだった藤本義一は、一時期川島の下でシナリオ修行をし、死後にそのときの師弟関係を題材にしたノンフィクション的小説「生きいそぎの記」を発表していますが、藤本義一の言葉を借りれば、川島は「孤独と狷介不羈の幕を四十七本目の作品で閉じた」とあリマス。「狷介不羈」とは、自分の意志を固く守って、何者にも束縛されないことを意味しますが、川島自身、松竹、日活、東宝（実際は東宝の子会社の東京映画）と製作会社を渡り歩き、あるときは会社の御用監督と呼ばれるほど忠実に本数を守り、プラグラムピクチャ監督としての役割を十全に果たした人物でもあります。

1938年に松竹に入社していますが、二千名の応募で八名しか合格しなかった助監督試験に合格し、渋谷実、島津保次郎、清水宏といった松竹大船撮影所の巨匠たちの助監督として活動していますが、付いた監督の中に何故か小津安二郎の名はありません。故吉村公三郎監督の著書の中で、監督が島津保次郎、チーフ助監が吉村公三郎、セカンド助監が木下恵介、そしてサード助監が川島雄三と中村登という布陣だったという記述がありましたが、何という豪華さでしょう。さて、その後、戦時中に応召された監督もいたため、穴埋めに監督に昇進、1944年「還って来た男」で監督デヴューしています。二十代半ばのことです。その後1955年に日活へ移籍、また1958年には東京映画へ移籍、その度にギャランティは二倍、三倍と上がったようで一流品を身につけ、連夜の銀座での豪遊と、まさに日本映画界の最盛期を謳歌した感が強いのです。

最高傑作との世評の高い「幕末太陽傳」（1957）は、いくつかの落語の筋を取り入れた洒脱な作品であり、幕末の品川宿の廓に生きる市井の人たちの本音と建前をきっちり区別した功利的な生き方をダイナミックに描いた作品です。後年、この作品の脚本チームに加わり、助監督を務めた今村昌平が撮った「豚と軍艦」（1961）の熱さとシニシズムは、このあたりが出発点ではないのでしょうか。今村は喜劇というジャンルの中に「重喜劇」という特異の分野を確立した人物だと私は思っているのですが、これは川島の助監督時代に培われた鋭い人間観察力と猜疑心が原動力になったのではないかと想像するのです。また、「幕末太陽傳」では浦山桐郎も助監督として付いています。どうしても、今村昌平、浦山桐郎の監督昇進後のリアリズムを基本にした作品群に私の場合は目が向いてしまうのですが、リアリズムを極めていくと喜劇的になり、さらに進めていくと笑えない喜劇になってしまい、それでも人間のすることだから客観的に見るとやはり喜劇だということなのではないでしょうか。

この作品もいいのですが、私としては「洲崎パラダイス　赤信号」（1956）の川島雄三の人間を描く上での凄みに似たものを忘れることができせん。傑作だと思います。この醒めた視線をどう考えればいいのでしょうか。どうやったところで、まともに生きていけそうそうにない男女の将来を応援するわけでもなく、これからも同じ蹉跌を続けながら生きていくしかないと言わんばか

りのラストです。これは、昭和という時代の貧困を今に伝えるものでもあります。このとき描かれた日本は、まだ高度経済成長期を迎える前の貧しい国なのです。誰もが健気に地道に清く美しく生きてきたわけではなく、無為に食い詰めてしまった人たちも数多くいたのです。本質的な人間の生活は時代が進んでも変わらないところもありますが、今以上の貧困がその時代にはありました。

今思えば川島雄三は45年の生涯で47本もの作品を遺した映画監督ですが、その中には完全な駄作、意欲作、名作が渾然としています。実に落差の大きな監督とも言えます。津軽の厳しい環境の中で年少期を過ごした川島雄三は、保守的で閉鎖的な家庭環境の中で近親婚を繰り返したことが原因とされる遺伝的な筋萎縮性側索硬化症という病を背負い、三十代近くになってその症状が顕著になりまともに歩行することさえ困難になっています。頭の中には常に死が暗い影を落としていたものと考えられます。川島雄三の得意とした喜劇（特にドタバタが好きだった。これは幼少の時の映画体験が大きく影響しているようです）の背景にあった暗い影を思うと、死にいそいだのではなく、行きいそがざるを得なかったのかと寂しさが一層募るのです。(3.23.2024)